

近代化過程における日中両国の漢字の改革について

張 栄 湄

B. 日中両国の簡略字の実態の比較

近代化過程における両国の漢字簡略化の重点の置きどころは同じではないが、実際に漢字を節減（制限）する事と漢字字形を簡略化する事は同じ目的の盾の両面の関係がある。両国は以上で述べた様にこの両面から漢字簡略化を展開して来た。特に漢字字形の簡略化は、中華人民共和国が成立してから、政府が力を重点的に注いで来た。日本では、漢字字形の簡略化は漢字簡略化の政策の中で従属的位置にあったけれども、政府が公の面に簡略字を採用する事を提起した時点(1873年)、本格的に取入れた時点(1923年)、実施に移す時点(1948年)は、何れも中国(1909年、1935年、1956年)より早かった。また日本の漢字字形の簡略化がその長い歴史の間に相当な経験を持っていて、一定の数の簡略字を制定・採用し、これらの簡略字は国民の言語生活の各面まで浸透している。だから、日中両国の簡略字の実態を比較する事は可能であるだけでなく重要な意味も持っていると思われる。以下これについて述べてみよう。

a. 日本の常用漢字表の簡略字

日本で現在使用している簡略字は、当用漢字の略字表に掲げられた131簡略字を土台として、当用漢字整理を経て常用漢字表で公布されたものである。常用漢字表では355字に「乱（亂）」の様に掲げられている。その表では266簡略字を認める事ができる。¹⁾

常用漢字表には当用漢字表より増加した簡略字体が135字あり、付録の簡略字整理表〈1〉の様に下線を付けたものである。この中で戦前に簡略化された字がそのまま認められたのは「来、尽、湿、叙、昼、国、条、虚、与、聴、様、戲、顕、摂、縄、児、寿、鑄、滯、帶、樂、藥、為、偽、鷄、漢、拡、仏」の28字で、戦前に簡略化された字に修正を加えて認められたのは「従、縦、庁、気、応」の5字で、また戦前に簡略化されたものに類推したのは「塀、瓶、浅、蚩、齊、壳、広、竜、稻、陷」の10字で、当用漢字字体表から常用漢字表に新しく認められた簡略字は「峡、挟、狭、壮、装、漿、状、将、寝、毎、海、悔、梅、繁、敏、侮、欄、黒、黙、墨、層、僧、贈、増、憎、単、禪、彈、戦、敵、巢、獸、儉、剣、險、検、験、謁、喝、渴、褐、掲、壊、嬢、讓、釀、粹、醉、碎、雜、壞、懷、効、勅、乘、剩、転、伝、亜、惡、恵、穂、臓、蔵、暁、焼、撃、暦、歴、缶、荘、芸、壘、洪、糸、県、専、畳、価、団、気、緘、覽、騷、鬪、収、淨、桜、霸、静、褒、痴、灯、翻」の94字である。常用漢字表では戦前に簡略化された簡略字体が認められたり、推し広げられたりすると同時に、相当な数の新しい簡略字体が認められた。常用漢字表は、これまでで最も多くの簡略字を採用した漢字表で、日本の

簡略字体の集大成とも言える。現在日本で一般に使っている簡略字は常用漢字表で取入れられた簡略字である。

b. 日中両国の簡略字の字数の比較

中国で現在使用されている簡略字は、1986年10月に再び公布された「簡化字総表」に載せた2,235の簡略字である。日本で常用漢字の中に認められる簡略字の数は以上で述べた様に266字である。絶対的な数で見れば、日本の簡略字の数は中国の十分の一位である。相対的にみれば日本では「常用漢字表」で掲げた1,945字の中に採用されている簡略字は常用漢字の全体の13.7%ほどを占める。中国では1988年3月、国家語言文字工作委员会と新聞出版署が連合して発表した「現代語通用字表」に7,000の漢字を載せており、その中で約三分の一(32%)が簡略字である。即ち相対的に見て、両者の比率の差はそんなに激しくはないと言えよう。

もし日本の常用漢字表で認められた266の簡略字を中国で発表した「簡化字総表」のように配列して比較すればどうなるか、ここで日本の簡略字を中国で1986年10月に発表された「簡化字総表」の配列に従い、それを基盤として両国の簡略字の数をもう一度比較してみよう。中国の「簡化字総表」は三つの表から構成される。

第一表は簡略化された簡略字350で、この350字は単独では使用できるが、他の字の簡略偏旁として使用できないものである。

第二表は簡略化された偏や旁²⁾ 14と簡略化された簡略字132で、その132字は他の字にも簡略偏旁として利用できる。

第三表は第二表で簡略化された偏旁と字を利用して推し広げた簡略字1,753字である。

日本の266簡略字は中国の「簡化字総表」の配列に従えば、以下の「簡略字整理表」のようになる。

簡略字整理表

整理表1 (182字)

庄田医老謁隱円塩応桜穩飯価画壊懷岳喝渴謁缶陷勸飲觀関気婦戲犧旧抛拳虚峽挟狭晚恵掲漢繼鷄芸擊欠
研県儉劍陰検献権顕験嚴効号国碎雜棧蚕残賛糸兎穉湿実写収従洩獸縦肅処叙将称焼証獎条状淨畳縄壤嬢
讓釀触寝尽罔粹酔穂随髓数声静窃撰専浅踐銭潜織双壯莊巢裝総騒墮対体台担胆団断遅痴虫昼庁聴勅通鉄
点転伝灯当覚稲關独屈式悩悩覇麦浜瓶弘仏併並堺辺弁宝豊褒与予余譽様来乱覽獵壘礼靈曆歴炉楼翻

整理表2 (22字、4 偏旁)

亜為区会楽広斉参齒寿乗単蔵属帶黒毎竜発兩万壳
「𠂔」、「尺」、「𠂔」、「亦」

整理表3 (43字、19字)

(亜) 惡
(為) 偽
(区) 欧殴驅枢
(会) 絵
(楽) 葉
(広) 拡鉉

(齊) 濟劑斎
 (参) 慘
 (齒) 齡
 (寿) 鑄
 (乘) 剩
 (単) 禪彈戰
 (蔵) 臈
 (属) 囑
 (帶) 滯
 (黒) 欄黙墨層僧贈増憎
 (毎) 海悔梅繁敏侮
 (竜) 滝
 (発) 廢
 (両) 滴
 (万) 勵
 (売) 続読
 (𠂔→𠂔) 榮營蚩勞
 (𠂔→𠂔) 覺学
 (𠂔→尺) 馱釈𠂔𠂔𠂔
 (𠂔→𠂔) 徑莖經輕
 (𠂔→𠂔) 𠂔恋𠂔𠂔

以上、日本の簡略字整理表は中国の「簡化字総表」のような三つの整理表から構成される。その中、整理表1は簡略化された182字で、この182字は簡略偏旁にならないものである。これは中国の「簡化字総表」の第一表に相当するものである。整理表2は簡略化された偏旁4³⁾と簡略化された字22で、この22字は簡略偏旁になり得るものである。これは中国の「簡化字総表」の第二表に相当するものである。整理表3が整理表2で簡略化された字と偏旁を使って推し広げた簡略字62(43+19)字である。これは、中国の「簡化字総表」の第三表に相当するものである。両国の簡略字の比較表を作れば以下の通りである。

日中両国の簡略字数比較表 単位：字

		日 本	中 国
第一表	推し広げない	182	350
第二表	推し広げる字	22	132
	偏旁	4	14
第三表 推し広げ	簡略字で	43	1,070
	簡略偏旁で	19	883
簡略字の総数		226	2,235
適用する字の総数		1,945	8,000

以上の様に中国の「簡化字総表」の配列に従って“押し広げられた”簡略字を除いての“簡略字”の数が中国の場合は482字（第一表と第二表を合わせると350+132で、その中の偏旁を除く）であるが、日本の場合は204字（偏旁を除いて第一表と第二表を合わせると182+22）である。日本の方は中国の約42.3%と少ないが、中国の方は通用している漢字は8,000字⁴⁾で、日本の常用漢字の約4.1倍である。従って両国の押し広げられた簡略字を除いた簡略字は各々の通用漢字に占める相対値を以て比べれば、結果として逆に日本での簡略字の比率は11%で、中国のその6%より高い。

一方押し広げられた簡略字の数は日本では僅かに62(43+19)字⁵⁾で、中国では1,753(1,070+683)字で、中国の方が日本の28.3倍に上り、非常に多い。一つの簡略字によって押し広げられた簡略字は、中国が平均8.1字で、一つの簡略偏旁によって押し広げられた簡略字は平均48.7字で、例えば“言→讠”と言う偏によって押し広げられた簡略字は151で、最高は“金→钅”と言う偏によって押し広げられた簡略字は215字に上った。（因に簡略化された字数を見れば押し広げるのは中国漢字の簡略化の重要な方法の一つであろう。）

さて日本の方は簡略偏旁により押し広げられた簡略字が平均4.8字、最高は偏旁“罌→尺”によるものが僅か5字であり、一つの簡略字によって押し広げられた簡略字は平均1.96字である。どちらも中国の場合より非常に少ない。（因に日本が簡略偏旁あるいは簡略字によって押し広げるのを簡略方法として実際に意識していないのかも知れない。）

日本の簡略字を以上の様に中国の「簡化字総表」の配列から見るのは、実際は簡略化の部分的に注目した分類である。この両者の比較の実質は両国の簡略化された字種の数、あるいは簡略化された構成部分の箇所数を比較するものである。この様な比較の結果を見れば、日本では簡略字は通用している漢字の全体に占める比率が相対的に中国より高い。つまり日本では簡略化された字種の数あるいは簡略化された構成部分の箇所数は相対的に見て、そんなに低い水準ではないであろう。

以上では不同的な視点から両国が現在使用している簡略字の数の相異を比べて来た。中国で通用している漢字の数は日本より随分多い。従って簡略字の絶対数をもって比較すると、日本より多いのが当然であり、その差もかなり大きい。しかし相対値から比べると、日本では簡略字が通用している漢字の全体に占める比率は中国より低いけれども、その比率の差がそれほど大きくはない。また日本の簡略字を中国の「簡化字総表」の配列に従って見ると、押し広げた簡略字(第三表)を除けば、日本では簡略字が、通用している漢字の全体の中に占める比率は逆に中国より高い事が分かって来る。これは日本でこれまで簡略化された字種の数あるいは簡略化された構成部分の箇所数は相対的に見て、そんなに少なくない事を示しているであろう。要約すると両国で簡略化された漢字の絶対数は、どの様な視点から見ても中国の方が日本よりかなり多い。これは中国では通用している漢字そのものが多いからである。一方相対的に見て簡略化された字種の数、或いは簡略化された構成部分の数が各々で通用している漢字に占める比率は、むしろ日本の方が中国より高い。この面から見れば日本の字形簡略化もかなり進んでい

る事が証明された。

c. 簡略化された後の両国の字形の比較

日中両国での漢字使用の事実在即して言えば、「同文」の関係にあると言えても具体的に通用している漢字の字形は長い時間を経て、様々な原因で相違するところが出てくる。ここでは日本の簡略字を基準として中国で通用している漢字の字形と比較してみよう。

先ず、両国の漢字が簡略化される前のこの部分の漢字の字形について考えてみよう。日本の常用漢字表では簡略字などが「乱(亂)」の様に掲げられて、この「括弧に添えたものは、いわゆる康熙字体の活字である。これは明治以来行われてきた活字の字体とのつながりを示すために添えたものである」と前書きに書いてある。つまり日本で漢字簡略化される以前にこの部分の漢字の字形は主に康熙字体を以て標準としたのである。その当時この部分の漢字の字形が中国のそれと大体同じであるのは当然である。従って簡略化される以前の両国の漢字字形を比較するのは必要ないと思われるので省略する。日中両国が時期的には別々に漢字を簡略化したから、簡略化された漢字の字形に様々な相違が出てくる。実際に両国で簡略字体が選定された時に簡略字使用程度を知る為に、相手の簡略字を参考にした事がないとは言えない。例えば第2章「日本近代化過程における漢字簡略化の歴史」で述べたように、日本の国語審議会は1942(昭和17)年6月「標準漢字表」を議決答申する時に、中国の南京政府教育部が1935年に公布した「簡体字表」と劉復、李家瑞共編『宋元以来俗字譜』等における簡略字の使用状況も慎重審議のうえ決定したことがある。けれども両国が漢字簡略化については共同研究をしたことはなかった。そのために両国が字形の異なる簡略字を取入れる事は避けられなかった。以下は、両国が別々に漢字を簡略化したために字形がどの様に違ってきたか、「当用漢字表」以後この傾向がどの様に進んだかと言うことについて述べたい。

現在日本で簡略化された266字を見ると、その中、中国で通用している漢字と同形或いは基本的に同形の字⁶⁾は僅か78字と、日本の全簡略字の29.3%しか占めておらず、その他の188字は中国の漢字と不同形である。「当用漢字字体表」以来、両国の字形の違う度合いは益々深刻になる。この同形78字の中で、当用漢字は55字、「当用漢字字体表」以後増加したのは僅か23字である。しかし不同形188字の中で、当用漢字は76字で他の112字は全て「当用漢字表」以後増加したものである。付録の簡略字比較整理表〈2〉は、これを具体的に示している。下線のある字は「当用漢字表」以後増加した簡略字である。これらの不同形の簡略字の中で、よく似ているものがある。

例えば〈日本〉恵、帶、為、亜

〈中国〉惠、带、为、亚

等である。以上の例を対照して見て、一瞬の判断で同じ字であると認める事ができるが、一方では字形がかなり不同で別の字と感じられるものも出て来た。例えば

a 〈日本〉訳、勸、読、拡、児、伝

〈中国〉译、劝、读、扩、儿、传

b〈日本〉従、壞、弘、芸、仮、濟

〈中国〉从、坏、拂、艺、假、济

c〈日本〉円、豊、歴、竜、発、霊、闘

〈中国〉圓、丰、历、龙、发、灵、斗

等である。以上の例を対照して見ると、a と b の組の字形は一部が不同であるが、c 組の字形は全く違う。さらに問題になるのは、両国の間で既にある程度存在した字形の不同混乱が、簡略化する事によって人為的に深まった事である。例えば日本は「濱」→「浜」と簡略化した。ところが中国では「浜」と言う漢字はずっと昔から現在まで存在していて別な意味、別な発音の字として通用している。中国の場合「濱」と言う字は『宋元以来俗字譜』にある「賓」の俗字を利用して「浜」に簡略化した。もともとと同じ「濱」を日本は「浜」に、中国は「濱」に簡略化した。また現在翻訳時には相手の独特な語はそのままの漢字を用いる傾向がある。恐らくこのため中国では日本の「横浜」と言う地名はそのまま書かれる事が多い。しかし「bin」と言う発音は以前のまにされている。実際に「浜」と言う字は中国語の正しい発音では「bang」である。「bin」と言う中国語の発音の簡略字は「濱」である。即ち現在の中国では一般に「横浜」と言う地名を書く時には日本の「濱」の簡略字を使うが、読む時には「浜bang」としないで「bin」と言う誤った発音をしている。両国の簡略化の違いから中国人には「浜」と「濱」を正しく区別して発音するのが難しくなる。勿論、正しく「横浜」と翻訳される場合もあるが、そうなれば日本をあまり知らない中国人は「横浜」と「横濱」が二つの異なる地名だと思うだろう。このような混乱、混同を起こすのは、恐らく日本が中国で通用している別字を用いて自分の簡略字にした為であろう。日中両国は一衣帯水の間で交流が頻繁であるから、お互いの影響を過小評価するのは適当でないであろう。

以上の類例は他にも幾つかある。日本の場合は「缺」は「欠」に、「藝」は「芸」に、「辨、瓣、辯」は「弁」に、「罐」は「缶」に簡略化した。日本のこれらの簡略化字は中国では別音別字として通用している。中国で「欠」は借りたまま返さないこと、「弁」は昔男性が被った帽子、「缶」は口が小さくて胴の部分が大きい焼物の器を意味する（この三つの字は一般辞書の第一の意味）。だから中国では「缺」、「罐」、「辨、瓣」は簡略化されていないが、「辯」は「辯」に、「藝」は「艺」に簡略化された。日本では「藝」を「芸」に簡略化して日中の間で混乱、混同を起こすばかりでなく、自国内でも次の様な混乱、混同を起こした。林大氏が「当用漢字字体表の問題点」と言う論文に以下の様に書いている。

「芸」については、別の香草のウンが本来この字形を持つのと差障るという非難がある。しかし、当用漢字の範囲内としては問題がないが、「芸」は芸草、芸香、芸亭など熟語も多く、目に触れる機会も稀ではない所に問題がある。

以上の類例の他には、通用している別の字によく似ている字が簡略字として用いられる場合

がある。例えば、日本が「絲」→「糸」に簡略化したが、この「糸」は日中両国とも通用している「糸」とよく似ている。「賣」→「売」に簡略化したが、この「売」は中国語の硬い外皮の意味の「売」とよく似ている。この様に字形の上の区別が小さ過ぎると字形上の混乱、混同を起こしやすく、理解、記憶上の負担を増やす。字形上の区別が小さ過ぎる二つの漢字を教えるよりは、寧ろ普通の十字を教える方が容易であると言う現場の先生の声がある。中国の「第二回漢字簡化（簡略化）方案草案」が廃案になった主な理由の一つは、「感」→「忞」、「愚」→「忞」の様に簡略化した結果、これら簡略化した二つの字形がよく似ていて、混同しやすいと言う事である。（因に中国では「絲」→「丝」、「賣」→「卖」と簡略化した。

日中両国が漢字字形を簡略化してから、字形の違う度合いが深刻になっただけではなく、混乱、混同を起こしやすい字も出来て来た。これについて、私は大変残念に思うが、これに対しては以下の様な考えが成立つかも知れない。中国語と日本語は元々別々の国の文字だから字形の違うのは当たり前の事で、双方の字形の間に混乱、混同や間違いやすいと言う様な問題は起きないのではないかと言うのである。私はこれに賛同出来ない。日中両国はある範囲内での同文のお陰で画国の交流に色々な便利が生ずる。これは素晴らしいことで、我々はこの恩恵を受ける初代ではない。日本は言うまでもなく中国から漢字を借りと同時に中国文化を取入れた例か沢山ある。しかし、それと共に、ここに上げたい例は、中国は日本から漢字を使う事によって西洋文明を学んだ事である。明治維新前後の傾向は東洋諸民族が西洋文明を学ぶ事であった。先駆として日本の福沢諭吉は西洋各国の文明を日本国民に紹介する時に漢字を借りて沢山の訳語、新語を持込んだのである。漢学の素養を相当に持った彼が、「汽」と言う字の発端についてこの様に述べる。

……是れと目的はなけれども、蔵書の康熙字典を持出して唯無暗に火偏水偏などの部を搜索する中に、汽と云ふ字を見て、その註に水の気なりとあり、是は面白しと独り首肯して始めて汽の字を用ひたり。……今日となりては世の中に汽車と云ひ汽船問屋と云ひ誠に普通の言葉なれども、其本を尋ねれば三十二年前余が盲捜しに搜し当てたるものを即席の頓智に任せて漫に版本に上せたるこそ、汽の字の発端なれ。⁷⁾

この他に「余が其コピライトの横文字を直訳して版權の新文字を製造したり」、政治新字として「演説」、「提案」、「賛成」⁸⁾ などがある。即ち彼が漢字によって西洋文明を日本、日本語に移入した。

西洋文明と、これらの漢字新語は日本人の心だけでなく中国人の心をも魅した。当時中国で西洋文明を学ぼうとした代表的人物の多くは日本との関係が密接で、最も有名な例としては孫中山、章太炎、王国維、梁啓超、陳独秀、李大釗、魯迅、郭沫若、田漢、郁達夫などがある。彼等は日本が西洋各国の文明を紹介したもの、或いは翻訳したものによって西洋文明を学び更に翻訳者としてこれらを中国に伝えた。中国が日本を経て西洋文明を輸入した時、これらの日

本人が漢字を活用し、その意味によって出来た漢字新語は、中国人にも馴染みのものとして理解しやすい。これは大体そのまま中国の外来語になる。1904年の統計資料によれば、当時中国が翻訳した世界各国の本は全部で533種、その中で6割の320種は日本語から翻訳、転訳したものである。ある研究によれば日本語は現代漢語の中で外来語の最大の来源で、中国の『新名字詞典』、『新知識詞典』のような本では日本語から借りたものが半分を占めると言う。⁹⁾これらの事が可能だったのも日中両国が部分的に同文だったお陰であろう。今の時代今の世界では、国々の交流が最も大切である。両国の先人が先祖から受取った同文と言う「財産」を利用して両国の進歩に大きな役割を果たして来たが、我々はこの共通文化遺産を少しでも捨てる理由はない。漢字簡略化は漢字の字形の複雑さ、多画性と言う欠点を減少する人為的な一つの方策であるから、もしこの人為的な施策によって字形の違う度合いが深刻になり、元々あった便利さが減って、以上の様な混乱、混同を起こしやすい簡略字が出来たらは、両国の言葉の壁が高くなり、厚くなってしまう。これは国際交流、とりわけ漢字文化圏の交流、日中の交流が盛んな今日において、極めて皮肉な事ではないだろうか。日中両国が共に漢字を使用するばかりでなく、共に漢字字体の簡略化を進めて来ながら、どうして一緒に研究しなかったか、どうして相手の合理的なものを広めなかったか。私はこれについて非常に残念な気持ちを抱いて来た。これは本論文を書く事の重要な理由の一つである。

他の視点から見れば、これ等の混乱、混同を起こす原因の一つは日中両国が共通に漢字を使用し、頻繁に交流していると漢字の体系そのものが膨大に過ぎる事によるのかも知れない。同一平面に置かれた五万に及ぶ漢字を合理的に簡略化するのは困難な作業である。これこそ両国の力を合わせて共同で簡略化して行く事が必要ではないだろうか。例えば既に述べた日本の例の中で幾つかの字は中国と比較して見れば、どちらの簡略化が適当であるか明らかになる。「濱」をもう一度見よう。この字は日本では「浜」に中国では「濱」に簡略化した。日本の場合は「さんずい」の偏十兵（音）と言う同音の要素の符号で置き換える（形声字を作る）方法で簡略化した様である。中国の場合は『宋元以来俗字譜』にある俗字を利用して「濱」に簡略化された。中国の方は昔からある字を利用して文字の一つの構成を出来るだけ同じ様に、即ち「濱」→「濱」と言う様に簡略化した。これに従って「賓」は「賓」に簡略化されたと言う次第である。換言すれば、この様な簡略化は総字数を増加しない一方で漢字字形の本来の統一を成るべく害しない様、また他の字に混同しない様に工夫している。日本のこの字の様に簡略化するのは混乱、混同を引き起こしやすいし、漢字字形の本来の統一に不利で、さらに「濱」→「浜」の様に簡略化したから「賓」の簡略化の方は不可能になった。（「賓」は「兵」となるから）

一方、日本で「假」を「仮」に簡略化した例がある。「仮」は「假」と全然関係のない別字で、『康熙字典』によれば『集韻』に「反」の意味と書いてある。「仮」と言う字の基本の意味は本物でないと意味で、即ち正面の事ではなく反面の事であろう。「假」を「仮」に簡略化するのは書き易く、死んだ古字を利用したばかりでなく、“会意”と言う中国の伝統的な方

法が生かされている。中国では「假」と言う字が簡略化されていない。もし、この優れた日本の簡略化の例を借りて簡略化すれば良い結果が得られるであろう。

また、異字体整理の方面において日中両国の差を見よう。

中 国	日 本
周	週
志	誌
並	併
发	髮
果	菓
娘	嬢
升	昇
历	曆

以上は常用漢字の範囲内で、日本では二つの漢字で表記するのに、中国では一つの漢字で間に合わせる例である。この場合には、中国は文字の使用効率を高めていると言えなくはないであろう。（この一つの組の字の中では少なくとも一つの不同形字が出て来るだろう。）日中両国のこれらの字を並べて比較して見てから、一層合理的な簡略化は表面から出て来る。

C. 日中両国の簡略字化の方法の比較

字体簡略化の方法について色々な視点から整理することが出来るし、既に様々な纏め方があったが、筆者は簡略字の由来する源を重要視する出発点として両国の簡略字化の方法による字形を比較しよう。

a. 日中両国の簡略字化の方法の比較

簡略字の由来する源は、大きく分ければ二つある。一つは既に存在する書き易い字（書き易い旧字）を利用してできた簡略字であり、もう一つは旧字を改造して出来た簡略字である。

日本の「常用漢字表」中の266字の簡略字について筆者が『康熙字典』と劉復、李家瑞共編『宋元以来俗字譜』を参照した結果によれば、これらの本から書き易い古文俗字をそのまま取入れて出来た簡略字と、それによって推し広げて出来た簡略字の合計は全部で179字に上っている。これは全簡略字の66%を占める。付録の簡略表〈3〉の1・aの部分はこれを示している。また松田舒編『五体字鑑』から、ある手写体を標準化して特に草書体を楷書化して出来た簡略字と、これを推し広げて出来た簡略字を見ると53字で、付録の簡略表〈3〉の1・bの部分に示している。これには点画の組合わせを書き易い形にする。例えば二点画を一筆にするものが、研（研）、並（竝）、海（海）、黒（黑）、増（増）などであり、全体の印象をもとにして筆法を簡略にするものが、織（織）、壺（壺）、様（様）、鶏（鶏）、両（兩）、満（滿）などである。以上二つを合わせて232字が、日本の簡略字全体の約九割を占める。換言すれば日本の簡略字は殆どが過去に例のあるものを、そのまま利用するものである。特に大量の古文俗字が採用さ

れている。これらは古くから、正字、俗字、噓字、本字、通用字、省字があるし、廃字を復活したもの、誤字を正当化したもの、草書体を楷書化したもの等もある。

以上の過去に例のある字を利用するものの他には、旧字を改造して出来た簡略字が34字で、全体の約一割を占める。これらの字が簡略化された方法はさらに三つに分けられる。一つは部分を省略するものであり、一つは書き易い符号的な形で置き換えるものである。もう一つは別の字を借りて出来たものである。

部分を省略するものは、付録の簡略字表〈3〉の2・aの部分に示してある。これには、点画など極小部分を脱するものが、例えば、騷（騷）であり、余分なものを省略して特徴ある部分を取るものが、例えば、余（餘）、疊（疊）、価（價）、圧（壓）、缶（罐）、予（預）、応（應）、団（團）である。

書き易い符号的な形で置き換えるものは、簡略字表〈3〉の2・bの部分に示している。これには部分を簡略な符号的な形で置き換えるものが、例えば壘（壘）、摂（攝）、澁（澁）、転（轉）などであり、部分を同音の要素の符号で置き換える（形声字を作る）ものが、例えば、浜（濱）、訳（譯）などである。

別の字を借りて出来たものは簡略字表〈3〉の2・cの部分に示している。これは弁（辨、瓣、辯）、仮（假）、圉（圍）欠（缺）である。「圉」は『康熙字典』によると「圍」とは全く別音別意の字で、形の特徴が似ている一方で、音声も考慮に入れたようである。（日本語の「圉」と「井」が同音）

これらの簡略字は過去に例のある字をそのまま復活したのではなく、多少改造して出来たものであるが、実際にその簡略字化する改造の方法は漢字の発展変化の歴史において、よく採用された方法である。例えば以上の過去に例のある字の中で医（醫）、余（餘）、参（參）、触（觸）、独（獨）、点（點）、虫（蟲）、声（聲）、条（條）、号（號）、処（處）などは明らかに都分的省略であり、覚（覺）、学（學）、乱（亂）、楼（樓）、会（會）、区（區）などは明らかに符号化である。

要するに現在日本の簡略字は主に過去に例のあるものをそのまま利用するものであり、その他には旧字が改造されて出来たものである。そして旧字の改造も過去にある簡略方法を用いているのである。

中国で現在使用されている簡略字は1986年10月に再び発表された「簡化字総表」の2,235字である。この「簡化字総表」の第二表は簡略化された偏や旁が¹⁰⁾ 14と簡略化された簡略字が132で、この132字は他の字にも簡略偏旁として利用出来るものである。これらは最も重要な意味を持っている偏旁と簡略字と言ってよい。なぜなら、これら偏旁と簡略字を利用して推し広げた簡略字は、簡略字全体の8割近い1,752字に上るからである。（第三表の簡略字全体は第二表で簡略化された偏旁と字によって作られるものである。）換言すれば、これらの14偏旁と、132の簡略字は中国の大多数の簡略字の縮図であろう。だから、筆者はこれによって中国の字体簡略化の方法を研究する。

まず、以上の中国の簡略字の中で過去にある例を利用するものがどれほどの割合を持っているのか、以上と同じように調べてみる。

「簡化字総表」の第二表で簡略化される14の偏旁の中、10は『宋元以来俗字譜』に例があるものであり、残りの4は松田舒編『五体字鑑』によると、偏旁が手写体を標準化して、草書体を格書化して出来ているものである。つまり、第二表で簡略化されている偏旁の全部が過去にある例を利用するものである。この14の偏旁によって推し広げられる簡略字が683字（第三表）である。

第二表で簡略化された132簡略字では『康熙字典』と『宋元以来俗字譜』に例があるものが80字、草書体を楷書化したものが9字で、これを合わせて89字となり、132の簡略字の7割近い字が過去にある例を利用して出来たものである事が分かる。この89の簡略字によって推し広げられる簡略字は837字（第三表）である。この14の偏旁によって推し広げられる簡略字と、89の簡略字（即ち第二表の中で過去にある例を利用したもの）によって推し広げられる簡略字（89簡略字を含む）を合わせると全部で1,609字である。即ち「簡化字総表」第二、第三表と言う中国の大多数の簡略字の縮図から見れば、過去にある例をそのまま利用して出来たものと、それによって推し広げられるものが中国のこの部分の簡略字全体の8割5分以上を占めている。

まとめて言えば中国の簡略字化の由来する源は日本と同じで、主に過去にある字を利用して出来たものと、それによって推し広げられるものである。

この他にも旧字を改造して出来た簡略字がある。これも部分の省略によるものがあり、例えば、郷→乡、産→产、録→录、業→业などの16字が、それである。部分を簡略な符号的な形で置き換えるものもあり、例えば堯→尧、肅→肃、聶→聂、など11字である。その中で同音の要素の符号で置き換える（形声字を作る）ものと、部分を会意的符号的な形で置き換えるものである。第二表の132簡略字の中で部分を同音の要素の符号あるいは会意的符号的な形で置き換えて出来た簡略字は達→达、審→审、隊→队などの8字で、これによって推し広げられる簡略字は30字ある。また第一表にも一定数量の同音の要素的な符号と会意的符号的な形で置き換えて出来た簡略字があり、よく知られているのが驚→惊、鄰→邻である。つまり、中国ではこれらの方法によって相当数の簡略字が出来ている。

日本でも、この簡略方法が用いられていないとは言えない。旧字を改造して出来た簡略字の中で「駅」、「釈」、「沢」、「沢」、「沢」の一つの組の字の部分を音声的に近い「尺」で置き換えているようである。「浜」も同じで、また「囿」の様に別の意味の古字を借りる時に、音声考えに入れる様であるが、この様な例が僅かだがある。しかし日本では中国の様に、これを簡略化の一つの方法として相当数の簡略字が出来たと言う傾向は見られない。日本の部分の省略によると言う簡略方法は中国でも使用される。

以上を総括的に言えば、日中両国の漢字簡略化の主要な方法は、昔から存在した書き易い字を利用したものと、これによって推し広げるものである。換言すれば日中両国の簡略字の由来する源としては過去に例があるものが圧倒的に多数である。ここに付け加えて言いたいのは日

中両国の簡略字化方法からみれば、簡略字についての主要な非難意見の一つである、簡略字が伝統文化を伝えにくい、と言う説は明らかに成立しないだろうと言う事である。この他には旧字が改造される際に部分の省略をしたり、符号的な形で置き換えたりする簡略字化方法も昔からよく用いられている。

以上で明らかにした事は日中両国での漢字簡略化は巨視的に見れば、用いる簡略化方法は大体同じであるが簡略化してから字形の違いの程度は深刻になった、と言う事である。

b. 日中両国の簡略化方法による簡略字形の比較

日中両国の漢字簡略化の方法を要約すると、一つは過去にある例を利用するもので、もう一つは旧字を改造するものである。ここでも日本の簡略字を基盤として二つの簡略化方法で出来ている簡略字を区別し、両国の簡略字形を比較したい。

現在、日本で簡略化されている266字では既に述べた様に、中国と同形あるいは基本的に同形字が全部で78字ある。この78字の中で、71字は『康熙字典』と劉復、李家瑞共編『宋元以来俗字譜』から書き易い字を利用する方法で出来た簡略字と、それによって推し広げて出来たものである。付録の簡略字整理表〈3〉の a の部分（傍点を付ける字）に示している。手写体を標準化して、草書体を楷書化する方法で出来た簡略字は6字である。付録の簡略字整理表〈3〉の b の部分（傍点を付ける字）に示している。これら過去にある例を利用するものを合わせると77字である。つまり両国の簡略字は同形あるいは基本同形の字が殆ど過去にある例を利用する方法で出来たもので、特に『康熙字典』と『宋元以来俗字譜』から書き易い字をそのまま利用すると言う方法で出来たものが多い。

日本で旧字を改造する方法によって出来た簡略字は35である。その中では中国の簡略字と同形のものは僅かに1字である。これは部分を省略する方法で出来た簡略字「与」である。部分を簡略な符号的な形で置き換える方法で出来た簡略字と別の意味の字を借りて出来た簡略字の中では中国と同形のものは1字もない。

以上、簡略字化方法によって出来た両国の簡略字の中、同形ないしは基本的に同形の字の割合を見て来た。ここに、はっきり現れている事は異なる簡略字化方法によって出来た由来の異なる同形字の比率である。日本で過去にある例を利用して出来た簡略字、特に書き易い古文俗字を取り入れて出来た簡略字の中に、中国の字と同形のものが圧倒的に多い。旧字を改造する方法では部分の省略によって出来た簡略字の中に中国の字と同形字が僅かにあるが、他の方法によって出来た簡略字はすべて中国の字と不同形である。もし両国が共同で字形を簡略化すれば以上の事実が参考になるであろう。

c. 中国の重要な字形簡略化の方法－簡略化された偏旁と字によって推し広げる簡略化について

「簡易字体の採用は、むしろ漢字を広く生かす道である」と言う考えを持っている日本では、常用漢字表に至る漢字の字形の簡略化は定着したと言えるが、表外字の字形をどうするかが、常用漢字表において残された一つの問題である。常用漢字表の「前文」には以下の様を書いて

ある。「常用漢字表に掲げていない漢字の字体に対して新たに表内の漢字の字体に準じた整理を及ぼすかどうかの問題については、当面特定の方角を示さず、各分野における慎重な検討に待つこととした。」

中日両国において漢字簡略化の実態と簡略字化方法を比較した時に、簡略化された字数から見て、中国の字形簡略化の重要な方法の一つは、簡略化された偏旁と字によって推し広げるものである。中国で現在使用されている2,235の簡略字の中で1,753字が簡略化された偏旁と字によって推し広げられたもので、即ち中国で現在使用されている簡略字の78.4%は推し広げる方法によって出来たものである。別の視点から言えば、中国の場合は使用率の高い字形と偏旁の簡略化に力を注いで、これによって推し広げる事により多くの簡略字が出来た。日本の場合は簡略化される偏旁と簡略字によって推し広げる事を簡略化方法として意識しないので、使用率の高い字と、字が構成される時によく用いられる偏旁についての簡略化に対して注意が足りなかったのかも知れない。例えば中国の場合は、最も多く推し広げる簡略字あるいは偏旁は金(钅)、言(讠)、糸(纟)、貝(贝)、魚(鱼)、鳥(鸟)、車(车)、門(门)、馬(马)、頁(页)、食(饣)、見(见)などで、これらは日本の常用漢字の中でも、常用されるものとして、かなりあるが、またこれらのものは全て過去にある例を利用している。これら12の字と偏旁の平均減画数は3.5以上である一方で、この僅か12のものによって推し広げられる簡略字は中国の全部の簡略字2,235の半分以上に当たる1,183字にのぼった。日本で簡略化された字の数が中国よりかなり少ないのだが、これが原因の一つであるかも知れない。実際に筆者の目から見れば、日本は推し広げるのを簡略化方法として意識しないだけで、推し広げないとは言えないであろう。例として「榮、營、螢、勞」、「駅、釈、扱、沢、訳」、「区、欧、殴、驅、枢」などは明らかに推し広げる事によって出来た簡略字であると言えるであろう。これだけではなく現在の日本には中国で最も多く推し広げられている簡略字と偏旁と同じ様に実際の言語生活で自発的に簡略化された例がよく見られる。

以上を総括的に言えば、中国の字形簡略化の重要な方法の一つは簡略化された偏旁と字によって推し広げるものである。もし日本がこの方法を持てば常用漢字字形に対して、もっと多くの字を一層合理的に簡略化する事が出来るであろう。この他に日本の常用漢字表において残された問題である表外字について、中国の様な推し広げによる簡略字と偏旁を単独として表¹⁾に作って、これを標準として公布すれば、表外字について解決する道を開くであろう。

注

- 1) これについては筆者が第2章「日本近代化過程における漢字簡略化の歴史」と、その章の注20, 21に具体的な説明を書いている。
- 2) 1964年3月に中国文字改革委員会、文化部、教育部(文部省)の「簡化字総表」の説明によれば、本表で言われている偏旁は、字の左側と右側に限らず、字の上部、下部、内部、外部も含む。つまり、ある字から分けられる構成部分である。本文も以上の規定によって論じる。
- 3) 実際に日本では、わざわざ偏旁だけ簡略化されることはなかったが、これは筆者は比較研究のために中国の簡略な偏旁を参照して、五つの簡略偏旁を認めた。

張 榮 涓

- 4) この字数は1966年再び発表した「簡化字総表」の説明によるもの。
- 5) 実際に日本が簡略偏旁あるいは簡略字によって推し広げる簡略化方法として意識する事はないであろう。
これも筆者が比較研究のために整理したものである。
- 6) 筆者は不同形字を一点一画の不同形、即ち多少の不同形の場合に画数の変化があるものとして規定した。
同形字と言うのは、これを除いたものである。
- 7) 『福沢全集緒言』より（平川祐弘著『進歩がまだ希望であった頃』講談社学術文庫910 P104）
- 8) 福沢諭吉の『英国議事院談』より（平川祐弘著『進歩がまだ希望であった頃』講談社学術文庫910 P104）
- 9) 劉成著『中外関係史論文集』学風出版社1969年 P46
- 10) 同注2
- 11) 中国が1964年公布した「簡化字総表」の第二表の様なものである。